



平和の鍵は憲法 9 条

～児童労働と闘うインドのアーティスト～

ジョン・デバラジ

ボーンフリーアートスクール

アーティストック・ディレクター

来日報告書

2010

目次

1. はじめに	p 1
2. 団体概要～ボーンフリーアートスクールとは	p 2
3. 活動内容	p 2
4. 会計報告	p 5
5. 今後に向けて	p 5
6. おわりに	p 6
7. 参考資料	
1) 来日日程表	p 7
2) 会計報告	p 8
3) 掲載された新聞記事	p 9
4) 「Back to the アートピースプロジェクト」(2011年プロジェクト)	p 10
5) ジョン・デバラジのプロフィール	p 12
6) ボーンフリーアートスクールの歴史	p 13

はじめに

ボーンフリーアートスクールは南インドのバンガロールにおいて活動し始めてから5年が経ち、2008年より児童労働と平和問題を関連づけ社会へ向けて発信してきました。2010年5月に、ボーンフリーアートスクール（以下、BF）のアーティスティック・ディレクターであるジョン・デバラジが招聘を受け、その来日は大変急な決定であったにも拘わらず、たくさんの方にご支援、ご協力していただきました。それはデバラジの芸術を学ぶことを切に願われた一個人の思いから始まり、計画する過程の中で、そして来日後講演などを通してBFの理念と活動を知っていただき、多くの方とつながっていくことができたと考えております。

今回の来日の目的は、①ジョン・デバラジの持つ個人の芸術の感性に触れ、参加者の方にテクニックを共有する、②インドにおける児童労働問題の意識啓発、③インドでのBFの子どもたちとデバラジによる平和運動を知ってもらうことの3点でありました。2010年5月13日～23日で、主に東京、千葉、神奈川、名古屋で講演およびパフォーマンスを行いました。今回の来日においての共通テーマは「平和の鍵は憲法9条～児童労働と闘うインドのアーティスト」でした。本報告書はその詳細をまとめたものです。

ボーンフリーアートスクールは設立当初より、多くの日本人の方との交流を持ってきました。スタディツアーや個人のご旅行により、あるいは研究論文のテーマとして取り上げるために、多くの方がここに足を運んで下さいました。その間、BFの理念に共鳴された方により日本各地でインドの子どもたちを応援したいという有志が集ってサポートグループが結成されたり、子どもたちが撮影した写真を展示して頂いたり、個人あるいは団体として財政的支援から物資の支援までしていただいています。このように皆様のこれまでのご支援なしにはこの度の来日も実現することなく、BFでたくさんの芸術作品を生み出し、子どもたちを教育へ送り込むことは可能ではなかったことでしょう。5年間でBFが直接育てた子どもたちの数は200人以上に上ります。その中には学校における勉学の道へ戻った者、アーティストとして志を持ち生きる若者、残念ながら路上へ帰らざるを得なかった者もいます。私たちは彼らが少しでも希望と夢を持ち、尊厳のある人間として生きていくことができるよう、これからも道を開いていきたいと願っております。

今回来日にあたり、たくさんの個人、団体など、皆様から大変なご協力、ご尽力をいただいたことに心から感謝を申し上げます。

**ボーンフリーアートスクール共同代表
中山実生**

2010年9月

1. 団体概要～ボーンフリーアートスクールとは

ボーンフリーアートスクールは、働く子ども、路上に住む子ども、債務奴隷の犠牲となった子どもたちのための学校です。「教育は楽しみから、楽しみは教育から」を信念に、子どもたちを教育現場へ戻すことを第一に、その過程で芸術、つまり音楽、ダンス、演劇、絵画、彫刻、写真、映画制作などを通してエンパワーメント（力づけ）していくことを目指しています。子どもたち自身がいまだに路上にいる子どもたちを自由にし、解放していくことを目指した市民参加型の運動です。芸術は、①身体的、精神的な回復を目指すセラピーの役割、②自尊心を回復し、エンパワーメントとなるものであると理解しています。BFでは子どもたちによる児童労働完全廃絶運動を、芸術を通し行っています。

ボーンフリーアートスクールは、2008年より、ヒロシマ・ナガサキの原爆と現在の核化問題を児童労働問題と関連づけて取り組んできました。この考え方を多くの人に理解していただくため、映画や公演などを通して広めていくことを願っています。

2. 活動内容

I. 講演

i. 平和と児童労働

現在、ボーンフリーアートスクールは児童労働と平和問題を関連づけた新しい視点から問題の解決を探っています。来日中、「平和の鍵は憲法9条～児童労働と闘うインドのアーティスト」と題し各地でデバラジは講演を行いました。骨子は以下の通りです。



➤ 生い立ち～路上で生まれたアーティスト

デバラジがこのような活動に関わった経緯であるが、彼は10人の兄弟姉妹を持ち、食事の前には必ず祈らなければ食事を与えないとする敬虔なクリスチャンの母と、常に人を笑わし公務員として家族のために働く父の元で育った。バンガロールで生まれたが、その後マイソールへ移る。小さい頃動物園で餌を狙いに来るサルを追い払う仕事をしていた。マイソールには大聖堂がそびえ、そこで礼拝の後に上映されるチャーリー・チャップリンの映画を見るのを楽しみにしていた。見よう見まねで始めたギターを弾き、教会の青年会で歌を歌って青春を過ごした。1977年にアンドラ・プラデシュ州を襲ったサイクロンで2万人の命が奪われた時には、デバラジは救助ボランティアとして現地に向かった。そこで見たものは死体の山で、死体を埋めることが仕事であった。その頃、貧者のための慈善救済活動をしていた教会の雰囲気になじめない



自分に気づいたという。20代はエンジニアとして市の都市計画に関わる政府の仕事について。しかし、そこでは汚職と腐敗を目の辺りにしたため、労働組合で活動するようになった。1万人の労働組合員を率いるリーダーとして労働賃金の引き上げなどの

運動に関わっていた。ところがある時、汚職を告発したことにより政府から解雇されてしまう。20代前半であった彼は、社会の矛盾について絵を描きはじめ、書き溜めた絵をカバン一つにつめて南インド中を旅行し路上での展示会を行った。最終地点のバンガロールについた時、ヴィダンソウダ（州会議事堂）の前で行った路上エキシビションで事件が起こった。それは、警察が展示した絵をめった裂きにし、デバラジの両腕を掴み「また同じエキシビションをしたら今度は逮捕だ」と言った。それに対し本人は「次の日曜日と同じ場所でやるから来てくれ」と返答したそうだ。ちょうどその時隣りで行われていた記者会見に出席していたジャーナリストたちが「アーティストが警察に叩かれた」というニュースを聞き、現場に駆けつけた。次の日それはどの紙面でも一面を飾り、バンガロールのアーティストたちがデモを行ったという。デバラジは「自分は路上で生まれたアーティスト」だという。昔からミケランジェロ、レンブラント、フリーダ・カーロなどの絵に触れ、マルクス、ニーチェなどの哲学書も読みこなしてきた。更に、音楽では、ボブ・ディラン、ジョン・レノン、ピッツィガーなどの影響を受け、ラテンアメリカの革命家チェ・ゲバラなどの思想も学んだ。インドでは平和運動や女性運動、ダリット（最下層カーストに属する人びとを指す政治的呼称）運動にも関わってきた。

そのような社会的背景を持ったデバラジはインドで30年以上もアートを通して児童労働問題に取り組んでいる。人びとに固定されてしまった考え方、例えば「家庭が貧しいから、子どもが労働に出されるのは仕方がない」という考え方を変えなければ社会は変わらないと信じている。それには、音楽、ダンス、演劇、彫刻、絵、映画などを通して人びとを考えさせ、また参加する者をエンパワーすることが大切だと考えている。

講演では、その他、インドのカースト制度の現状、児童労働とそれにより利益を得る市場経済の現状、インドの児童労働と日本との関わりについても言及した。抑圧された子どもたち自身が立ち上がること、ボーンフリーアートスクールの子もたちがアートに関わり、自分を表現し訴えられる人間に育つことが重要だと説いた。

▶ 9条をインドへ

インドでは教育費よりも軍事費が勝り、核開発が進みパキスタンとの緊張を生んでいる。しかし、インドはマハトマ・ガンジーが率いた非暴力（アヒムサ）を信じる国である。日本の憲法9条はこのアヒムサの精神を持っている。世界には24カ国が軍事を捨て、10カ国が核を保有している。だから、我々はヒロシマ・ナガサキの史実をきちんと理解し、子どもたちに伝える義務を持っている。夢はインドの憲法に9条を反映させることだ、と熱く語った。都庁9条の会の集いでは、今年ニューヨークで行われた核拡散防止条約（NPT）再検討会議に参加した会の方の報告会でも時間をもらい、児童労働の現実やインドにとっての9条の重要性などについて訴えた。

ii. 女性の権利について

NPO 法人 JKSK（女子教育奨励会—女性の活力を社会の活力に）は、日本を変えるために、強いリーダーシップを持って行動する女性の育成と支援をミッションとし、女性の教育支援をバングラデシュで行っている。その会合にて、デバラジはインドの女性の地位について、労働環境や幼児婚の問題、ダウリー（持参金制度）が原因のハラスメントなど、現在もインドに残る深刻な女性差別について言及した。この状況は児童労働と似ており、人びとの固定した考え方を変える必要があると述べた。

II. アートのレッスン

個人とグループを対象として4回ほど開催。グループの活動では（5月15日）二部に分かれた。第一部は、インドの児童労働におけるアートの役割についての話があった。アイスブレーキングでは、「コンドルが行く」を笛にのせてデバラジが演奏、参加者の緊張を解きほぐし、アットホームな



気持ちで始めることができた。音楽・絵画・彫刻・ダンス・演劇はすべてにリズムがあり、連結しているという。また、デバラジがアーティストになった経緯、児童労働とアートがつながっていること、またその心理的・精神的効果、アートセラピーについても話があった。第二部「クリエイティブアーツ～アート表現にトライ」では、アートをする時の心構え、描く時の力の入れ方、何を見て描くかの優先順位、構図の入れ方の説明がなされ、実際に鉛筆画、パステルでの直彩に

よる絵の実践を行った。

III. パフォーマンス

- i. 音楽公開練習（名古屋）；名古屋の子どもたちの和太鼓にあわせ、デバラジは笛を演奏し、「原爆許すまじ」の歌などを合唱した。
- ii. アーティストが集合する場で、児童労働のことを音楽や映像を通して報告。アーティストによるライブペイント、グラフィック絵画や子どもたちの絵画の展示、ボリウッドダンス（インド映画で踊られるダンススタイル）やファイヤーダンスも日本のプロダンサーによって披露された。



IV. 映画上映

「チェチェ」はチャーリー・チャップリンをモデルとした児童労働を風刺したショート映画である。「レストランで働く子どもたち」「家事労働をする子どもたち」「ごみを拾う子どもたち」の3本からなり、コミカルにストーリーが展開し笑いが満載である一方、児童労働という深刻な問題を風刺し、鑑賞者には疑問を投げているところもある。5月13日の来日した日にベンズカフェで発表した。会場では、観客が共に歌い、ダンスを踊り出す人も出た。会場にはBFの子どもたちの版画が展示された。

その他、デバラジの芸術作品紹介のスライド、「歴史の旅」、「アナン～喜びの賛歌」などが紹介された。

V. 今後の活動についての話し合い

- i. 愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団（名古屋）との「ぞうれっしゃがやってきた」プロジェクトについて

同合唱団が長年取り組んできた歌による平和と動物の命の大切さを伝える活動「ぞうれっしゃ」のインド版を制作する話が2008年よりされていた。それ故、原作者小出隆司氏、作曲者藤村記一朗氏、副団長員山口直子氏とジョン・デバラジとの間で会合が持たれた。インド版「ぞうれっしゃ」では日本での「ぞうれっしゃ」の史実をインドで伝えると共にインドの児童労働と核問題に関して触れる作品づくりをしたいという意向がデバラジより伝えられた。パペット（大きなマスクやぬいぐるみ）、映像使用、ダンスや劇を盛り込み、インドと日本の子どもたちで共同制作したいとのこと。

さらに、「ぞうれっしゃ」の舞台である東山動物園も見学。名古屋市東山総合公園動物園長・次長小林弘志氏とも会合。園長より動物園のスタッフ用のジャケットがプレゼントされた。また、原作者小出氏のご自宅に宿泊させていただき、親交を深め、今後の共同プロジェクトの可能性を探ることができた。その後、東京の上野動物園も訪れた。戦後、象のいない同動物園にインド初代首相ネルーがインディラという象を寄贈し、それ以来日本とインドの交流は続いている。ネルー首相が送ったメッセージも見ることができた。

ii. 学生団体アニメピースとのサダコアニメーション制作

学生団体アニメピース (<http://www.animepeace.org/>) の方との会合で、佐々木禎子さんの話をアニメーション化しインターネット配信を世界でしたいとの要望があった。デバラジが提案したのは、世界にいる心に傷を負った 10 人の女性（サダコズシスターと呼びたい）が、何らかのきっかけでサダコ像を見に行き希望がわいてくるという物語にしてはどうか、とのこと。その際、デバラジやボーンフリーアートスクールの子どもたちの協力を得たいとの申し出があった。

3. 会計報告（別紙）

期間は 2010 年 4 月から 6 月です。表 1 では収支、表 2 では支出を記しており、表 3 は繰り越した金額をボーンフリーアートスクールの活動経費に充てたもので 2010 年 5 月から 6 月までを含みます。

4. 今後に向けて

ボーンフリーアートスクールは 2010 年 8 月 15 日に 6 年目を迎えました。今年秋より 2011 年夏にかけて 1 年間平和キャンペーンを行っていきます。本プロジェクトは「Back to the アートピース (Art Peace) キャンペーン」(仮) と呼び、キャンペーンとして 2010 年 9 月より 2011 年 8 月までインドおよび日本にて展開していきます。キャンペーンのハイライトとして、BF の子どもたちおよびアーティストの日本招聘を実現させ、日本の子どもたちにとってもインドの子どもたちにとってもお互いにエンパワーされるワークショップ、公演を目指します。

そのために、ストリートチルドレンの人生を描いたノンフィクション映画「アナン～喜びの賛歌」(監督・脚本・音楽・撮影ジョン・デバラジ) を日本とインドで主に公開し、児童労働の啓発を行っていきます。そして秋より、新しいプロジェクト「ぞうれっしゃがやってきた (インド版)」が始まります。子どもたちと音楽、ダンス、劇などオリジナルのものを創り出し、来年パフォーマンスを行っていきたいと思います。詳細は別紙に記していますのでご一読下さい。

5. おわりに

今回の招聘はアーティストでアートセラピーを専門にされている大木由美氏の呼びかけに始まり、多くの支援者の方により講演会やアートワークショップの計画が進められました。大木氏は今回の経験を通し、以下のように述べられています。「デバラジ氏の作品を初めて目にした2007年より、彼の作品に映し出された精神的な美とすごみに私は触れてきました。彼の絵を見た時、傷ついていた自分の心が回復され、生きる希望を見つけ、それ以来いつも自分への励ましとなってきました。人の心を救う素晴らしいアーティストであるジョン・デバラジさんにもう一度会い、学び、彼のようになりたいと思い、招聘を考えました」。彼女はピースボートに乗り、世界の子どもたちに色鉛筆とクレヨンを渡し、「世界は一つ～絵は心をつなぐ」をテーマに絵を通して子どもたちにありのままの心を表現してもらう取り組みをしてこられました。2008年の世界9条会議でその作品を発表し、今現在アートセラピーの道を歩んでおられます。

ボーンフリーアートスクールは、この芸術を通して傷ついた心を癒す取り組みを働く子どもやストリートチルドレンを対象に行っています。アートはセラピーであり、そしてセラピー以上のパワー、つまりエンパワーする力を持っています。自分のアイデンティティを見失った子どもたちが舞台に立ち、自分なりに表現をすることで自信をつけ、自覚を持ち人間性を取り戻した生活を送ることの大切さを知ること、それが大切だと思っています。そのため、BFではアートをセラピーとエンパワーメントとして捉え、多くの子どもたちが読み書きができる人になるよう、尊厳をもって生きるおとなに成長していけるよう、今後も活動を続けていきます。

デバラジが帰国したときの最初の言葉は「私はどこに行っても多くの日本の人びとの温かい心と誠意に触れました」と言っていました。そして彼は以下のように続けました。「私の日本滞在中に献身的なサポートをたくさんの方にいただき、感謝を申し上げます。10日間に渡る滞在や講演などを各地で準備して下さったことに心からお礼を申し上げます。日本で過ごした時間はどの時をとっても充実しており、楽しむことができました。平和を構築するためにお互いが協力してその働きをなす必要性を強く感じ、自分の中でもそのことをさらに確信することができました。また憲法9条をインドに広めることの重要性、それが、世界をインドを軍事化から解放し、奴隷状態に置かれた働く子どもたちを自由にするにつながると確信しました。日本の多くの方々が、インドの児童労働問題や平和問題に関心を持ち行動を起こそうとしていることを知ることができました。人間性豊かな、そして平和の確信をもった今後の行動が社会を自由するのだと信じています。これからも皆さんとつながっていきたく願っています。ありがとうございました。」

この報告書を通して、今回のデバラジの来日を多くの方々にサポートしていただいたことにボーンフリーアートスクールを代表し心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。また、今回の活動のために、寄付をして下さった方、講演やパフォーマンス

などを準備し実現して下さった方、通訳の方、交通費、食費、宿泊などをこころよく受け持って下さった方、その他様々な形でご協力して下さった方々に特別感謝を申し上げます。今後もインドと世界の児童労働を廃絶していく運動をボーンフリーアートスクールが担うために、皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

ジョン・デバラジ来日日程 2010年5月

日時	内容	場所	主催者	参加者人数
13	チエチエ～笑いが世界を変える (上映会)	Ben's Café(高田馬場)		30
14	アートレッスン (個人対象)	千葉		1
15	アートレッスン「インドのアートに触れる～社会におけるアートへの取り組み」	池袋		10
	講演「ボーンフリーアートスクールの挑戦」	名古屋	愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団	80
16	東山動物園見学／合唱練習	名古屋	愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団	80
17	講演「平和の鍵は憲法9条～児童労働と闘うインドのアーティスト」	高田馬場	チームピースチャレンジャー	30
18	講演「平和の鍵は憲法9条～児童労働と闘うインドのアーティスト」	千葉	チームピースチャレンジャー	30
	アートレッスン (個人対象)	千葉		1
19	スピーチ「ボーンフリーアートスクールの活動と平和運動」	JKSK サロン (都内)	NPO 法人 JKSK (女子教育奨励会)	30
20	アートレッスン (個人対象)	千葉		1

	講演「インドの現実＝平和と児童労働」	立教大学	立教大学	50
21	9条の会のつどい	都庁	9条の会のつどい	30
	“SRI DURGA” Arts can create a culture of liberation～子どもたちを労働から自由にするのは芸術の力～	FAVELA		30
22	講演「平和の鍵は憲法9条～児童労働と闘うインドのアーティスト」	神奈川、鶴間	チームピースチャレンジャー	40
23	ピースバイシクル in Tokyo 雨天のため中止、代わりに食事会	都内		20

会計報告

2010年4月～6月(来日前～来日後)

収入

表1

	費目		ルピー(注1)	円
1	寄付金	(2010年4月～5月)		302555
2	事業収入	物販売り上げ		104100
		謝礼金(講演やアートワークショップでの講師料)		62300
	合計			468955

支出

表2

	費目	詳細	ルピー	円
1	事業費	飛行機代(インド～日本往復)	34800	69600
		ビザ代	420	840
		旅行保険	800	1600
		移動費(空港往復と市内)(注2)	3000	6000
		交通費(関東圏)		1770

		飲食費(滞在中)		5065
		印刷代		800
		講師代(ジョン・デバラジ)	35000	70000
2	機器購入費	(ボーンフリーアートスクールにおける撮影やインタビュー用のボイスレコーダー、電池など)		22900
3	備品・消耗品			304
4	ボーンフリーアートスクールの教育活動繰入金(注3)			290076
	合計			468955

表

3 ボーンフリーアートスクールの教育活動繰入金(2010年5月～6月)

	費目	詳細	ルピー	円
1	教育費	高校入学金(1年間);アナン	8500	17000
2		制服代(アナン)	2000	4000
3		教科書代(アナン)	1600	3200
4		日常用品(靴・私服;アナン)	1500	3000
5		学用カバン(15人)15X300ルピー	4500	9000
6		制服代(10人)	4000	8000
7		通学定期券代(年間、8人X870ルピー)	6960	13920
8		学習用品(15人X500ルピー)	7500	15000
9	ボーンフリーアートスクール 寄宿舎運営費(1か月)	食糧費(20人)	25000	50000
10		ガス代(調理用)	1000	2000
11		賃貸	8000	16000
12		電気代	1300	2600
13		水道代	1100	2200
14	事務局運営費	人件費(スタッフ4名分)	32000	64000
15		通信費(インターネット・電話)	12500	25000
16		燃料費(ガソリン代など)	10000	20000
17		交通費(子ども)	5075	10150
18	繰越金	教育活動費	12503	25006
			145038	290076

注1;本報告では全て1ルピー=2円(2010年5月現在)で換算計算

注2: 来日準備のための費やした交通費(2010年4月~5月間)

注3: ボーンフリーアートスクールの活動費(2010年5月~6月)に充てられた。詳細は表3

「日本の人口を超える子どもたちが、インドで働かざるを得ない生活を送っている」

インド南部バンガロール市で児童労働をしていた子どもが共同生活する「ボーンフリーアートスクール」を運営。二十三日まで講演で日本各地を回る。

世界の児童労働は二億人以上。その半数がインドだ。五年前に設立したスクールは、子どもが演劇や絵画などの芸術活動で得た収入で暮らし、読み書きを学び、自立を目指す。親がアルコール依存症だ

ジョン・デバラジさん

労働児童でインドに撤廃

この人



■日本の人口を超える子どもが働かざるを得ない

「自由」に表現すること。被爆者との交流から作られた傷をいやしていく。路上パフォーマンズ「白いで盗みをする子どもに罪があるのか。爆弾を作る大人は罪に問われないのに」。

根底にあるのは平和への願い。「子どもの幸せを考えることは、ガンジーの非暴力につながっていく。インドでも憲法九条ができる五十三歳。(奥田哲平)

東京新聞 2010年5月21日朝刊

プロジェクト名：

「Back to the アートピース (ArtPeace) キャンペーン」(仮)

本プロジェクトは「Back to the アートピース (ArtPeace) キャンペーン」(仮) と呼び、キャンペーンとして 2010 年 9 月より 2011 年 8 月までインドおよび日本にて展開していく。キャンペーンのハイライトとして、ボーンフリーアートスクール (Bornfree Art School International) の子どもたちおよびアーティストの日本招聘を実現させ、日本の子どもたちにとってもインドの子どもたちにとってもお互いにエンパワーされるワークショップ、公演を目指す。キャンペーンの背景と目的は以下の通りである。

背景：

世界では 2 億 1500 万人の子どもたちが、インドでは日本と同じ人口数、約 1 億人以上が学校へ行けず、労働のくびきにつながれている。子どもたちは路上をさまよい、虐待や拷問にさらされ、生き延びるために犯罪に手を染めざるをえない。一方で、各国政府は人間の発展ではなく、人間の破壊にお金を大量に費やし、多くの子どもたちは基本的人権である教育の権利を十分に実現することがなく早すぎるおとな時代を迎えている。労働による子どもへの身体、精神への被害は計り知れるものではなく、路上から或いは仕事現場から救出された時点で、それへのリハビリには更に大きな努力が必要となってくる。

キャンペーンの目的：

ボーンフリーアートスクールでは 2010 年 9 月より「Back to the アートピースキャンペーン (仮)」と称して、アートを通して平和と子どもの権利の実現を目指してインドと日本を中心に活動していく予定である。その目的は以下の通りである。

1. 児童労働に関する意識啓発；児童労働の真実を広め、基本的人権である教育の権利を子どもたちに保障することを訴える。そのために映画「アナン～喜びの賛歌」の各地上映、インド版「ぞうれっしゃがやってきた」の上演を行っていく。
2. 世界平和を目指す；国際平和を築くため、憲法 9 条について議論し、世界の核化を防ぐために何ができるかを考える。①ヒロシマ・ナガサキの史実から現在の核開発の問題をより多くの人に知ってもらうこと、②日本国憲法 9 条の考え方、③非暴力「アヒムサ」の考え方を若い世代に伝えていくことを目指す。
3. 子どもたちのために環境を守る；環境の権利を子どもたちに伝えていく。自転車を使って平和ラリーを行い、軍事開発による環境破壊と汚染を考える (インド・日本)。

以上の 3 点を柱としキャンペーンを行っていく。

主催者；

(インド) ボーンフリーアートスクール

(日本) 各地団体

招聘者

- ボーンフリーアートスクールの子ども（希望；8名）
- ジョン・デバラジ（アーティストック・ディレクター）
- 中山実生（ボーンフリーアートスクール共同代表&通訳&ファシリテーター）

キャンペーン日程（案）

2010年：キャンペーンを1年間展開（日本・インドにて）

- 「アナン〜喜びの賛歌」の各地上映（インドでは11月14日子どもの日に初公開）
- 演劇プロダクション「ぞうれっしゃ」の制作・公演

2011年

- 7月26日：日本来日（大阪入り→広島行き）
- 7月27日～8月4日：「平和をつくるのは私たち」国際ナショナル平和&アートキャンプ（仮名）（広島）
- 8月5・6日：パフォーマンス（広島）
- 8月9日：パフォーマンス（長崎）
- 8月10日～18日：オキナワ・ピースバイシクル（沖縄）
- 8月19日～21日：「ぞうれっしゃ」公演（名古屋）
- 8月23日～25日：アートワークショップ&パフォーマンス（東京）

プロフィール ジョン・デバラジ John Devaraj



彫刻家、画家、演劇家、音楽家、フィルムメーカー、写真家、ライター、建築家など多岐分野に渡り芸術家として活躍。インドにて30年以上、芸術を通して子どものエンパワメントを目指し児童労働問題に取り組んでいる。また、平和問題、ダリット問題（カースト問題）、女性問題などにも取り組む。

2000年NY国連本部にて開催された「子ども兵士会議」や2004年フィレンツェで開催された「児童労働世界会議」のアーティストックディレクターとしても活躍。

インドでは「マルグリディズ」「ムッティナハーラ」「マネ」など映画美術監督作品多数。児童労働の現場に踏み込んだドキュメンタリーフィルム「歴史の旅 (History Expedition)」(2006年作成) がサンフランシスコ国際ショートフィルムフェスティバルにて選ばれる。

2007 年よりピースボートにてシンガポール～インド間の海路にて児童労働及びアートの役割について講演、パフォーマンス、ワークショップを行う。2008 年にはアーティストとして生きる被爆者の方へのインタビュー及び撮影を行う。現在「平和の預言者 (Prophets of Peace)」と題した証言ドキュメンタリーフィルムを制作中。また同年にはバンガロール～ラホール間を自転車で旅する平和サイクルラリーをリードする。インドの子どもたちがパキスタンの子どもたちへ書いた平和メッセージの手紙 7000 通を集めた。

日本の憲法 9 条をインドに広めようとする活動も開始。広島・長崎の原爆をテーマにしたダンス劇「白い花 (White Flowers)」を発表 (2008 年)。以来、インド 6 大都市にて 50 回以上公演。またバンガロール市、コーチン市、バロダ市に佐々木貞子さんの千羽鶴をイメージした平和モニュメントを作成し、各都市に寄贈した。ボーンフリーアートスクールの創設者。

ボーンフリーアートスクールの歴史

2005 年 8 月 15 日 インド・カルナタカ州バンガロール市にて設立

2006 年

- 「世界で一番大きなラブレター (World's Largest Love Letter)」作成 ; パキスタンの子どもたちに向けた巨大平和メッセージ&ペインティング。100 万人の両国の子どもたちがサインし、インドからパキスタンの地震被害者に届けられた(写真)。
- 「歴史の旅 (History Expedition)」カメラを持った子どもたちが児童労働の現場をまわり、3 万枚の記録を残す。2007 年、写真は証拠として国会に提出される。労働大臣、国会議員と国連職員との会合も行う。

「歴史の旅 (History Expedition)」とは、インドの子どもたちが児童労働の現場を回りカメラで記録する旅。ここで述べる歴史とは、権利を奪われ早過ぎるおとな時代に足を踏み入れさせられている働く子ども、債務奴隷の子ども、路上で生きる子どもたちの「今の歴史」である。写真のトレーニングを受けてきたボーンフリーアートスクールの子どもたちが、2006 年カルナタカ州周全土、2007 年タミール・ナドゥ州を回り、同州政府が指摘した 100 種類以上の児童労働現場をカメラで記録した。子ども写真家 25 名は全部で 3 万枚の児童労働の写真を生み出した。日本では、「働く子どもの遺産と伝説キャンペーン (www.olal.net)」を通してエキシビションが開催されている。

- 「児童労働にレッドカードキャンペーン」(FIFA ワールドカップ同時開催)

2007年

- 「スパルタクスリターンズ」の公演 ; 150 人の役者と共に行った子どもの債務奴隷をテーマにしたミュージカル劇
- 「歴史の旅」タミール・ナドゥ州
- 「ピースボート世界一周の旅」に講師として乗船 (シンガポール～インド間)
- 公立学校改善運動

2008年

- 「Art 9 Peace Divine (芸術と憲法九条が世界に平和をもたらす)」キャンペーンを開催；第九条世界平和会議参加（千葉）および 5 大都市での講演とパフォーマンス
- ヒロシマ・ナガサキデー（8月）；「Shiroi Hana（白い花）」発表・各地にて公演
- ピースバイシクル（Peacebycycle）；バンガロール～ラホール（約 3000 キロ）を自転車に乗り、平和と子どもの権利訴える平和ラリーを行う。約 7000 通の平和メッセージをインドの子どもたちからパキスタンの子どもたちへ宛てた手紙を集める。

ピースバイシクル（Peacebycycle）

インドの子どもたちも、パキスタンの子どもたちも戦争ではなく、平和を願っている～それを肌で強く感じた PEACEBYCYCLE。インドの子どもたちから託されたパキスタンの子どもたちへのラブレター。「私たちは同じインダス文明を分かち合う兄弟・姉妹」「私たちは友達」「お互い闘うことはやめよう」国境を越えた親愛が紙の上で交わされた。平和を願う、戦争に反対する、そんなシンプルなメッセージはこの両国間では大きな意味をなす。2008年11月26日に起こったムンバイでの大規模なテロの後、私たちが想像するはるか早くに「戦争」「軍事行動」といった言葉がメディアで飛び交い、両国で緊張が走って現在に至っている。

ボーンフリーアートスクールは、前代未聞の夢の平和自転車ラリーに出かけた。35人、そのうちの3分の2は元児童労働者でありストリートチルドレン。33日間、2869キロ、8州を自転車で横断。2008年11月1日、南インドのバンガロール市内にあるマハトマ・ガンジー銅像の前で Peacebycycle は旗揚げされた。目標は一日 100 キロメートル。目的はひとつ。軍事費を減らし教育費を増やし、インド・パキスタンの友好平和を実現させ、全ての子どもたちの教育の権利を保障する、であった。

2009年

- 「チェチェ～笑いが世界を変える」（ショートフィルム）発表
- 「アナン～喜びの賛歌」撮影

2010年

- 映画「アナン」編集開始
- 「児童労働にレッドカードキャンペーン」（FIFA ワールドカップ同時開催）1ヶ月キャンペーン。ファイナルマッチではバンガロールにて 15 試合が行われ、カルチュラルショーも行われた。40名のスリランカの子どもたちも参加。

発行

ボーンフリーアートスクール

Bornfree Art School International

住所 : No.21, 2nd Cross, GH Layout, 3rd Block East, Jayanagar Bangalore 560011 India

電話 (代表) ; +91-9886011830 (日本語) {スカイプ名 ; nakayamamioi}

メールアドレス ; mioinakayama@gmail.com / bornfreeart@gmail.com

ホームページ ; <http://www.bornfreeart.org>

ブログ : bornfreeart.blogspot.com (英語)

mioinakayama.blogspot.com (日本語)

活動のご支援をよろしく申し上げます

ご寄付先 郵便振込口座 : 01300 - 1-56760

加入者名 : ボーンフリーアートスクール